

東洋大学井上円了研究会第一部会

井上円了の学理思想

清水 乞 編著

目次

井上円了の学理思想

刊行にあたって	西義雄	一
---------	-----	---

一、哲学	三
------	---

学祖の建学精神たる真如観と妖怪学	西義雄	五
------------------	-----	---

井上円了の哲学理想――

井上円了の『大乘哲学』	大鹿実秋	五
-------------	------	---

富永仲基『出定後語』再考――

井上円了のインド哲学研究 菅 沼 晃 …… 六

——『外道哲学』を中心に——

初期著作にみられる井上円了の東・西哲学の対比 清 水 乞 …… 二七

二、宗教・倫理・心理・教育 三三

明治時代における井上学祖のキリスト教批判の考察 伊 東 一 夫 …… 三七

井上円了における初期倫理思想 河 波 昌 …… 五三

——『倫理摘要』をめぐって——

倫理学を中心に 石 岡 信 一 …… 七六

——倫理通論と日本倫理学案からみた円了の倫理学——

井上田了の宗教学・・・・・・・・・・・・・・・・高木きよ子・三二

井上田了の心理学の業績・・・・・・・・・・・・・・・・恩田 彰・三三

井上田了の教育観・・・・・・・・・・・・・・・・祖父江章子・三五

三、民俗・・・・・・・・・・・・・・・・三六

学祖の学問と民俗学・・・・・・・・・・・・・・・・大島 建彦・三三

井上田了の靈魂不滅論・・・・・・・・・・・・・・・・金岡 照光・三六

『妖怪百談』に見られる不思議庵主井上円了の啓蒙活動について……………川崎ミチコ…三二

四、その他……………三九

井上円了の国語国字観……………森章司…六一

——『漢字不可廢論』をめぐる——

隨筆に現れたる井上円了の思想……………河村孝照…四五

修驗道を中心とした学祖の学理思想……………中山清田…四九

『哲学堂図書』怪談草紙部解題稿……………塚田晃信…四六

あとがき……………清水乞…四八

「井上円了の学理思想」刊行にあたって

西 義 雄

東洋大学創立百周年記念事業の重要な一環として「学祖井上円了学術総合研究」の企画が昭和五十三年から始められた。この研究は東洋大学現任の教師研究員等を主とし、三部会に分かれて実行されて来た。即ち第一部会は「井上円了の学理思想の研究」、第二部会は「井上円了と西洋思想の研究」、第三部会は「井上円了の著作全集の解明」であつた。ところが図らずも筆者がこの学術総合研究の総括責任者となるようにと、大学当局からの要請にあつた。実は已に二十数年前、「大学附置東洋学研究所」の建設と同時に、「学祖円了研究室」の併置をも求めたという因縁もあり、その上、第一部会の研究員にも加えられていたので、無力なことは充分承知しながら、各部会の研究発表会などにも、時々出席していたからであらう。しかるに去年末になつて、以上の三部会の研究諸士の異常な努力が実つてそれぞれ、立派な研究成果が挙げられた。このことの報告と共に神作学長から、当の学術総合研究総括責任者として、これらの成果刊行の「はしがき」を書くように促がされるに至つたので以下、措辞を列ねる。

さてこの第一部会の使命は、前述のごとく「井上円了の学理思想」の研究であるが、「学理思想の研究」とは「学問上の理論の研究」の義と見、これを円了自身の用語でいえば、正に彼が重視した「哲学」思想の研究にあたると思うのである。即ち彼の哲学館開設趣旨の最初に、「それ哲学は、百般の事物に就いて其の原則を定むる学問にして、上は政治・経済諸学より下は理工学に及び、皆其の原理原則を斯の哲学より資らさざるものなし。……即ち哲学は万学を総轄する学と称すべきもの」と言い、更に「哲学要領」中には、「哲学は一切の思想の法

則、万物の原理を究明する学にして、広義に言えば、諸の学問の中、一として哲学でないものはない」と言っているからである。しかるに今日一般に「哲学」と言えば、諸大学の学科組織の上から見ると、多学部中の一なる文学部に属し、その文学部の多学科中の単なる一学科としての「哲学」として取扱われている現状である。しかるにこの第一部会の「円了の学理思想の研究」成果として呈出された報告には、以下のごとく四項目に亘つての研究が載せられている。即ち円了の(一)哲学、(二)宗教、倫理、心理、教育、(三)民俗、(四)その他(国語等)についてそれぞれ四、五名の研究者の報告が呈出されている。

以上の研究報告を一見して、これは円了の学理とする「哲理」思想のみの研究ではないのかと疑う人もあるいはあるかも知れない。しかし円了の「哲学」観は、前に彼の用語として引用したごとく、一切思想の法則原理の究明であり、一切の学問思想の根源学理を明らかにするものであるし、しかもその根源的立場とは、当時の世界哲学史上においても未曾見なる中正完備な「哲学理想」即ち「物心不二、一体」なる「真如」観に基づく主張している。その上に、真如を本体とすることは、また、現象をも示すこととなること、恰も水(体)を示すには雲霧、雨雪、河海水等の現象を以てするが如く、本体即現象、現象即本体と言う甚深な哲理を明示するに至っている。したがって彼の本体なる「哲学理想」(即ち真如)を具体的に明示するためには、彼の現象界に関わる諸思想をも検討しなければ、彼の「哲学」の真相を解明し得ないこととなる。かかる義趣を考慮して本研究報告は、円了の哲学、宗教、倫理、心理等の四項目に亘り研究を進め、以て「円了の学理思想」全体を明解しようとしたのである。この点は則ち第一部会研究委員の苦辛の計画の成果として、読者の通読を切望するところである。

一、 哲 学

二、

宗教・倫理・心理・教育

三、民 俗

四、 そ の 他

執筆 者（執筆順）

西 義 雄	東洋大学名誉教授
大 鹿 実 秋	（故）元東洋大学文学部教授
菅 沼 晃	東洋大学文学部教授
清 水 乞	東洋大学文学部教授
伊 東 一 夫	東洋大学名誉教授
河 波 昌	東洋大学文学部教授
石 岡 信 一	東洋学研究所研究員
高 木 き よ 子	東洋大学文学部教授
恩 田 彰	東洋大学文学部教授
祖 父 江 章 子	東洋学研究所研究員
大 島 建 彦	東洋大学文学部教授
金 岡 照 光	東洋大学文学部教授
川 崎 ミ チ コ	東洋大学文学部講師
森 章 司	東洋大学文学部教授
河 村 孝 照	東洋大学文学部教授
中 山 清 田	東洋大学文学部非常勤講師
塚 田 晃 信	元東洋大学短期大学助教授

井上円了の学理思想

一九八九年三月一〇日発行

東洋大学井上円了研究会第一部会

清 水 乞 編著

発行者

東洋大学井上円了記念学術振興基金
運営委員長 神 作 光 一

東京都文京区白山五一二八―二〇
電話〇三（九四五）七五六四
教務部研究助成課

印刷 株式会社フクイン

あとがき

清水 乞

創立百周年を前にして、昭和五三年一〇月、東洋大学は井上円了學術振興基金を設置し、学祖の思想研究を奨励した。これに応じて、学内において、総合研究グループが結成され、第一、第二、第三の部会に別れて、各々の問題意識のもとに研究が開始された。本論文集はこの総合研究グループ・第一部会の研究成果の一部である。長年にわたり、われわれの研究を助成し、ここに、その成果発表の場を与えられた、当運営委員会に対して、厚くお礼申し上げる次第である。

学祖が成長し、活躍した時代は日本歴史を通じて、最も変化の大きかった時代の一つであり、一方、昭和という時代も、彼の時代に劣らず、激動の時代であった。いま、彼此両時代を対比する余裕はないが、彼の時代は幕藩体制が崩壊し、急速に近代化＝欧米化が促進され、その要請に応じて、合理主義的・功利主義的西洋思想が導入され、この流れの中で近代アカデミズムが確立されてゆく。われわれの時代も、また、敗戦という未曾有の体験を契機として、君主国家から、民主国家へと変り、自由主義的・民主主義的国家体制の確立が急がれた。それに伴ないアメリカの実用主義思想が導入されたのである。彼の時代の論壇的アカデミズムに対峙した、学祖の哲学館創設は現代アカデミズムに対する反省の原点ともいえるものであろう。

学祖の生涯にわたる著書・論文などを見る時、その多量・多様さを前にして、われわれは幻惑されるのみであ

る。従来の学祖に対する評価の多様性も、これに原因するところが少なくない。学祖の思想と行動を、時代を追って、通観してみるに、西洋の哲学的原理を研究し、その成果に基づき、東洋、特に、日本思想の大系を確立した時期。次いで、その実践の場として、哲学館及び哲学館大学の経営と巡講を専らとした時期、大学経営から退き、修身教会を中心とした社会教化活動の時期。以上の三期に大別することができるのであるが、この間、哲学、宗教、倫理、教育、心理及び諸般にわたる著書・論文・随筆が発表され、先に述べた通り、幻惑されるのものが残されたのである。その論述の態度は、論調が多岐にわたるにもかかわらず、学術的一貫性がみられる。つまり、一つの論題を繰り返し論じ、個別から融合へ、学究から啓蒙へとという点が特徴として指摘することができる。われわれはこの多様性を統一する中心理念を明確にする意図をもって、代表者金岡照光教授の下に、本論文集のタイトルである「井上円了の学理思想」の研究を総合研究のテーマとして設定した。

タイトルの中心である「学理」という術語が抽象的であったため、部会以外でも疑問とされることがあった。この術語の概念について述べておくことは、本論文集の性格―論文主題の多様性―を理解していただくために必要であると考えるので、一言しておく。

明治三十七年三月に刊行された『円了講話集』には四〇篇の論文・評論が集められているが、編者秋山悟庵は、その例言において、これを文学・宗教・倫理・教育及び雑部というような学問分野によって分類しようとしたが、各篇の内容が各分野に重なっているため、分類することができず、発表年次によつて編纂せざるを得なかったと述べている。これは明治二〇年以前の著書は別として、その後の学祖の著書・論文・評論などの特徴であり、これが思想・行動の基調であったことを物語っている、本論文集においても、一応の分類を行なっているが、論文の素材となる対象は同じであつても、目的と方法が異なっている論文が多い。特に『妖怪学講義』を対象とした

論文を一括した点は考慮の余地があるが、この点、ご理解いただきたい。

さて、学祖は「哲学」という術語を広狭両義に、自由に使用している。しかし、広義に使用する場合にあつても、その根底には「思想の法則、事物の原理を究明する学」という哲学の定義は、決して、忘れられていない。

諸学の基礎は哲学にあり、ということである。諸学に内在する理想（本体）を解明することが学祖のいう哲学である。おもうに、『哲学新案』を著す動機を、学祖は哲学が微視的になり、本来の在り方を失ないつつあるためであると語っている。急速に論壇化しつつあるアカデミズムに対する警告でもあったのである。

この結果、商業哲学、工業哲学、農業哲学、医術哲学……といった、彼此両時代に、なじまない術語をもつて、学祖は哲学を拡大して行つた。この態度は哲学の実践といえる。河波昌論文が指摘する如く、この実践における「統合理念」において、諸学説はそれにおいて成立させられているのである。この「統合理念」は学祖のいう哲学理想、つまり「哲理」に当る。森章司論文は、端的に、この哲理は仏教のいう真理であり、これを外部に向つて個別に開示するのは「智恵」、つまり「如実知見」によるものである、と指摘している。したがつて、われわれのいう「学理」とは人間のあらゆる思想・行動の円満完了ならしめている本体、西義難論文の基調となつている「真如」にほかならない。「井上円了の学理思想」とは諸学に内在する哲理を開示した学祖の智恵を解明すること、といい換えられる。

第一部会においては、学祖の著書を個別に検討することから始めた。二人の分担研究者が、各自の専門とする立場から、一冊の著書を分担・熟読し、先に述べた「学理」が開示されている具体相を、方法的に自由な態度で、把握することに努めた。昭和五五年十月、中間報告として、小冊子『学祖井上円了の学理思想研究』（五〇頁）を公表し、昭和五六年九月を限度として、三年間の研究成果を各分担研究者が最終的に報告し、第一期の

研究を完了した。左の六論文は第一期の研究成果報告書によるものである。

金岡照光 井上円了の靈魂不滅論—シナ学との対比において—

川崎ミチコ 『妖怪百談』に見られる不思議庵主井上円了の啓蒙活動について

大島建彦 学祖の学問と民俗学

河波昌 井上円了における初期倫理思想—『倫理摘要』をめぐる—

塚田晃信 『哲学堂図書』怪談草紙部解題稿

大鹿実秋 井上円了の『大乘哲学』—富永仲基『出定後語』再考。

なお、大鹿実秋教授は昭和六一年九月二十四日逝去されましたので、これは先生の最後の論文となったものである。続稿を期しておられたが、第二期の研究成果発表をまたず、逝去されたことが惜まれる。

昭和五八年より第一部会代表者に故大鹿実秋教授が就かれ、第二期の研究に入った。第二期においては、第一期の「学理思想」の研究成果を踏えて、学祖の思想に対する「今日的・将来的意義」について、研究の視点を拡大することによって、検討することになった。この間、分担研究者の口答発表を中心に討議が重ねられた。昭和六一年度は総合研究終了に備えて、宗教学部門に高木きよ子教授、心理学部門に思田彰教授を分担研究者に迎え、研究グループの充実を計ることができた。

昭和六一年九月、部会代表者大鹿実秋教授の逝去により、筆者が部会代表者となり、わずか二カ月間ではあったが、総会研究終結の事務処理に当った。

第一期、第二期の研究成果報告作成に際し、左の五点に留意することが再確認された。

(1) 井上円了の学理思想の基礎となった東西思想

(2) 井上円了の学理思想の体系と特徴

(3) 井上円了の学理思想の同時代的・今日的評価

(4) 井上円了の学理思想における啓蒙的（社会的）立場

(5) 通仏教からみた井上円了の仏教観及び宗教観

分担研究の課題によって、右の五点に軽重がみられることは当然であるが、第二期の研究において、常に留意した点であった。

学祖は、主に、明治二〇年代の主著を通して、その基本的哲学理論を発表し、その後は、専ら、理論の實踐を著述と講演によって示した。常に大学と巡講を通して、各階層の人々に接し、そこから問題点を感じとり、その人々に応じて、時には高踏的に、時には平易に、哲理を示した。その主題は社会問題から日常身の諸問題に及び、多岐を極めている。この点は繰り返し述べたところである。したがって、常識的であり、しかも、表現が平易であるため、アカデミズムの観点からは看過され勝ちな重要問題が含まれている。『妖怪学講義』はこの典型ともいべきもので、学祖の学理が具現しているものといえる。本論文集では民俗学の部門としたが、これに止まらず、哲学、心理学の部門に入れた論文においても言及されていることは故なしとしない。ここに寄せられた論文は、研究出発当初の方法論の影響によるものであるが、学祖の著書の解説に多くを当てているが、民俗学、心理学、その他の部門では、学理の具体相から帰納的考察された論文も多い。しかし、第一部門の研究目的が達成されたかどうかについては、諸賢の批判に委ねるほかない。

最後に、長期にわたる研究に参加された分担研究者の氏名を掲げて、謝意を表す次第である。

第一期 菅沼晃 清水乞 西義雄 金岡秀友 大鹿実秋 金岡照光 田村晃祐 河波昌 河村孝照 石岡信一
森章司 中山清田 荒井貢次郎 大島建彦 岩佐貫三 伊東一夫 塚田晃信 近藤文剛 祖父江章子 川崎ミ
チコ 里道德雄

第二期 菅沼晃 清水乞 西義雄 金岡秀友 大鹿実秋 里道德雄 田村晃祐 河村孝照 石岡信一 森章司
荒井貢次郎 伊東一夫 近藤文剛 山中清田 祖父江章子 高木きよ子 思田彰 (以上、順不同)
なお、この総合研究に基づく成果が左の著書・論文に発表されているので参考のために列举しておく。

河村孝照 「井上円了の妖怪学と仏教の業思想」『東洋学研究』第一八号昭和五九年三月 東洋大学・東洋
学研究所)

岩佐貫三 「井上円了の「純正哲学」研究覚書 陰陽篇(その一)」『中央学術研究所紀要』第一五号 昭和
六一年七月 中央学術研究所)

田村晃祐 「井上円了と真宗」『井上円了研究』6 昭和六一年一二月 東洋大学・井上円了研究第三部会)
岩佐貫三 「井上円了の「純正哲学」研究覚書 陰陽篇(その二)」『中央学術研究所紀要』第一六号 昭和
六二年七月 中央学術研究所)

森章司 「井上円了と真宗大谷派教団」『東洋学研究』第二二号 昭和六三年三月 東洋大学・東洋学術
研究所)

恩田彰 『新校心理療法』昭和六三年一二月群書)〔校閲解説〕

(井上円了学術総合研究第一部会代表者)

